子どもシェルターモモ
No.19
2020年4月30日
News Letter

発 行
認定NPO法人子どもシェルターモモ
〒700-0861 岡山市北区清輝橋1丁目2−9
電話·FAX 086−206−2423

CONTENTS

・巻頭言 …… 1
・インタビュー「人」 …… 2
from bizen 代表　原田良二さん
副代表　森 敏彰さん
・ボランティア養成講座 …… 3
・ルポ「学南ホーム」探訪記 … 4、5
・「モモの家」通信 …… 6
・「あてんぽ」通信 …… 6
・「en」通信 …… 7
・事務局だより …… 8

■表紙絵「春のおすそわけ」内村 暁

巻 頭 言

休眠預金からの助成金

認定NPO法人子どもシェルターモモ　理事長　**東　隆司**

本年度、モモは休眠預金等活用法に基づく休眠預金等の活用の実行団体に指定されることになり、今後3年間にわたり、総額2000万円を上限とする助成金を受けられることになりました。

モモが子どものセーフティネットとして、この11年間活動してきた実績を評価され、今後の発展を期待されたものと大変うれしく思っています。

助成金は、施設退所後の子どもたちのアフターケア事業の拡充のために使用する計画です。

現在、モモは清輝橋にある住宅建物を賃借して事務所とアフターケア事業の場所として使用していますが、子どもシェルターや自立援助ホームから退所する子どもの外、児童養護施設から退所する子どものアフターケアを引き受けるようになったことから、支援を必要とする子どもたちの人数が増加し、支援の内容も多岐にわたるようになったため、現在の建物では手狭になっていました。

充実した支援をするためには、子どもたちが自由にくつろげる場所、相談できる場所、料理作りや飲食のできる場所、ときには宿泊できる場所などが必要です。

そのためには、事務所の機能と子どもの支援の機能を分離することができ、支援のための場所を拡充する建物が必要です。

助成金は、10年後も事務所やアフターケア事業の場所として使用できる十分な広さを備えた建物を購入する費用として使用したいと考えています。

新型コロナウイルスの問題の先行きが不透明なのが気がかりですが、できれば今年度中に建物を確保したいと考えています。

会員の皆様には、建物情報の提供とアフターケア事業へのご協力をお願いしたいと思います。

インタビュー人

from bizen

代　表 **原田良二** さん

副代表 **森 敏彰**さん

若手備前焼作家たちによる震災復興支援チャリティを2011年から毎年行い、売上げの一部をモモにも寄付下さっている作家グループfrom bizenの代表と副代表を訪ね、さまざまな成果を挙げた活動について伺いました。

原田良二さん　　森 敏彰さん

チャリティを始めたきっかけ

原田：2011年3月、東日本大震災の津波の映像を見て、何かやらなければと思ったのですが、自分たちが現地に行って力仕事ができるわけではない、でも焼き物で何かできるのではと思ったのが最初です。

森　：ただ、僕たち若手ではアイデアは浮かんでも実現できるのか不安でした。そのような時に、多方面で活躍する先輩作家の藤原和さんが、道筋を示してくださいました。大急ぎで4月にはfrom bizenを立ち上げ、80人の作家の作品507点を集め、岡山駅地下の一番街で午前10時から販売を始めたのですが昼過ぎには完売。140万円を寄付することができました。これまでの寄付額は800万円を超えます。

活動を通して学んだこと

原田：ふだんお客さんと直に接する機会が少なかったので、たくさんの人が募金箱にお金を入れてくれるのは純粋に嬉しかったです。また備前焼が完売したのを見たのは初めてのことで驚きました。

森　：いつも独りで自分の工房にこもって作品を作り、販売活動も個々でしていた作家たちが、まとまって活動できたのは画期的なことでした。外に出たことでコミュニケーションスキルや外界へのアンテナも身についたのではないかと思っています。

原田：毎年、無償で作品を提供してくれる作家を50人位探し、当日は早朝から作品搬入、会場設営。多人数をまとめることは大変です。毎年チャリティの時期が近づくと胃が痛くなりますが、思いを持っていても独りでは何もできないと思っていた焼き物屋が、一つにまとまることで社会貢献ができたことは嬉しかったです。

森　：通常の販売では、作家もお客さんも自分を中心とした考えで販売や購入をするので、それぞれが違う方向を向いています。でも、チャリティ販売では、会場やメディア、ボランティアなど100人以上の関係者やお客さんが皆一緒に、復興支援という同じ目標に向かっているという得難い経験をしました。

10回目でひと区切り

原田：2年目までは日本赤十字社を通して東北の被災地に全額寄付しましたが、3年目より、地元岡山の団体と共に支援の輪を広げたいと、復興支援に関わっているAMDAと子どものために活動しているシェルターモモに寄付することにしました。3回が終わったら5回、5回やったら次は10回と話し合ってこれまで続けてきました。

森　：この間に広島土砂災害、西日本豪雨、新型コロナウイルスなどいろいろなことが起きました。西日本豪雨では、真備の被災者に直接、備前焼の食器を届けに仮設住宅にも伺いました。

　初めは寄せ集めのグループでしたが、回を重ねていくと、全体を見ることができるメンバーも増えました。次回を最後に岡山駅でのチャリティは終了しますが、これまでに培った考え方やつながりを基礎に、新しいチャレンジができたらと思っています。

備前焼への想い

原田：祖父の代からの作家の家ですが、作家になるつもりは全くなかったです。でも、子どもの頃、近くの川底の粘土で作品を作り、土管を窯にして焼いたりして遊んでいましたから、物を作るということが生活の中にあったと思います。卒業後、地元に戻り陶芸の道へ入りました。このチャリティの経験は今後も役に立つことが必ずあると思っています。

森　：桃山時代から続く窯元ですが、ただ“跡を継ぐ”のは嫌でした。学生時代に文化財について学び、作家になってから仲間と共に海外へも展開したことで、外から「備前」を見ることができました。今後は国内外を問わず、多くの方が備前へ来て、楽しんでいただける仕掛けを生み出したいと思っています。

（文責：笹田志穂）

令和元年度ボランティアスタッフ養成講座終了

回	日程	テーマ	講師
1	1月24日	困難を抱えた子どもの理解と援助① ～モモのミッションと子ども担当弁護士の役割～	東　隆司さん （弁護士・子どもシェルターモモ理事長）
2	1月31日	困難を抱えた子どもの理解と援助② ～児童相談所の役割と虐待～	佐藤靖啓さん （岡山市こども総合相談所相談担当係長）
3	2月7日	困難を抱えた子どもの理解と援助③ ～虐待のトラウマ～	中野善行さん （精神科医・なかのクリニック院長）
4	2月14日	困難を抱えた子どもの理解と援助④ ～子どもの権利～	石倉　尚さん （弁護士）
5	2月21日	困難を抱えた子どもの理解と援助⑤ ～発達障がい者への援助～	壺内昌子さん （精神科医・発達障害者支援センター医療専門監）
6	2月28日	モモの家・学南ホームの子どもたちと ボランティアでお願いしたいこと	青野雅世さん（モモの家ホーム長） 白井和年さん（学南ホームホーム長）
7	3月6日	あてんぽ･アフターケア相談所enの子どもたちと ボランティアでお願いしたいこと	岡嶋安起さん（あてんぽホーム長） 西井葉子さん（子どもシェルターモモ事務局長）
8	3月13日	シェアリング ボランティア登録のご案内	中野善行さん （精神科医・なかのクリニック院長）

例年のように１月から３月までの毎週金曜日の夜「ボランティア養成講座」を８回開講予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大により６回～８回は中止にしました。５回までの受講生にボランティア登録を呼びかけ、６名の方が登録されました。

受講生の感想

第1回

シェルターと自立援助ホームを設立されるまでの経緯や理念、運営の難しさを伺い、それでもセーフティネットとしてあり続けることで、何人もの子どもたちが助けられたことに「福祉」のあり方を改めて考えました。家族でなくとも、自分を支えてくれる人につながることは、その後の生きていく力に大きな影響を与えると思います。その中で「多彩」な生活を、という想いは、子どもたちの将来を深い部分まで慮って支援されているのだと感じました。

第2回

「虐待とは、子どもの安全が守られているかということ」。世の中の知識として、虐待＝被害となっているのが悪い風潮なのだと思います。国全体が「安全が守られているか」という本来の意味に考えを変えられたら、SOSの信号が出しやすく社会で見守っていくという状態に変えていけるのでは。

第3回

子ども時代のトラウマが、一生その人間を苦しめるかもしれないというのは心苦しい。実際にトラウマを抱えた子どもたちに正しく（この言葉が正しいかわからないが）接するのは、非常に難しく責任も大きいだろう。防衛的適応は、生き残るために必要、というのは、なるほどと思った。

第4回

何度も面会を重ねないと、子どもの本音が出ないのではと思う。意見を言っていい訓練を小さい時からできたらいいのに。意見が出るまで待つ覚悟が必要。一時保護所が殺風景でびっくりしました。規則もきつく、言葉が出ないです。権利が奪われている子どもにとって、過酷な現場だと改めて考えさせられました。小学校でこの話をしてほしいと思う。

第5回

それぞれの強みを見つけ、こだわりを捨ててじっくり見る。その人の苦手なことで、その人を責めない。みんなと一緒だと思うと、できないことにフォーカスがあたってしまう。まずは仲間を増やし、具体的な対策、強みを一緒に考えるようにしようと思いました。

ルポ 探訪記

学南ホーム

ホームミーティングで問題解決

2019年10月1日、新しく男子用自立援助ホーム「学南ホーム」が法界院駅から徒歩2分ほどの閑静な住宅地にある和風住宅で開設されました。学南ホームでは問題はホームミーティングで解決していく方針で運営していくという方針を出されているので興味を持って訪問しました。ホーム長の佐原啓理さんにインタビューしました。

町名から命名

「学南ホーム」名の由来は、岡山大学や岡山理科大学の南に位置する学南町という町名をそのまま戴いて付けました。命名に当たっては、お洒落なカタカナの名前や大人の思いを込めたものも候補にあがったのですが、建物が和風であるため、建物に合った名前に落ち着きました。学南町の住民になるので、町内会やお隣のマンションの管理組合には事前にご挨拶に伺い、ホームの役割へのご理解をお願いしました。10月7日に設けた「オープンホーム」には関係機関の方々と同時に、町内の皆さんもご招待して建物全体を見ていただき、理解を得ることに力を入れました。シーツやタオルケット、食器などの日用品の差し入れを頂いたりしています。門に掛けてある看板は岡山県立大学の学生が制作してくれました。多くの方々の見守りの中で出発できました。

格子戸のある門

自信につながる関わり方を大切に

学南ホームの職員は、児童福祉分野で働いていた人は、3月末に退任された白井さんだけで、4月から採用された2人を含めて、4人は経験がありません。20代、30代、60代と年齢も職歴も違います。そうした職員同士で開設までの6ヶ月間、それぞれの思う学南ホームの目指すところをしっかり語り合ってきました。職員の個性を生かし、スクラムを組んで子どもたちを支えるチームを作る上で避けては通れない作業でした。

面談室から庭を臨む

子どもの居室

2019年11月から子どもの受け入れが始まり、職員同士で頻回にミーティングを行い、

1．現状の課題を理解し合う。
2．課題解決の作戦を考える。
3．具体的な方法を検討する。

ことを大事にしています。

子どもの課題を話すときにはミーティングに子どもも参加します。社会に出て自分で問題解決の方法を導き出す時のために、自分の問題を本人抜きで考えるのは良い結果に結びつかないことになります。自分の問題を解決するよい機会、また自分の未来に責任を取れることが、自信につながっていくと思うからです。

自立・自律を育てる関わりを大切に

学南ホームにも門限など、一定のルールはあるのですが、遊びたい盛りの子どもたちです。子どもがルールを守れない理由を自身の言葉で述べることが大切だと思っているので、頭ごなしに施設のルールを盾に厳守を強いるようなことはしません。規則を守れなかった理由を聞き、周りに心配をかけないようにするにはどうしたらよいかを一緒に考えていくことが、子どもたちの自立・自律につながっていくと考えているからです。だから、学南ホームに居る

学南ホームの職員さんたち

間にたくさん失敗して職員や同居している子どもたちと一緒に考える経験をしっかり積んでほしいと思っています。

共に成長する

虐待を受けて施設で育った子どもたちは、育ちの中で意識してではなく、大人の顔色を伺い、大人のご機嫌を取ることが上手くなっていたり、自分の思いや気持ちを伝える方法が乱暴で、人や物に当たってしまうこともよくあります。

先日、子ども同士で言い争いをした後、その憤りが冷めず、争いとは関係のない職員に向けて近くにあった植木鉢を投げつけました。幸いにも職員の足元に落ちたので怪我には至らなかったのですが、それを見ていた私は、即座に大声をあげて叱ってしまったのです。少し時間が経ち、クールダウンした子どもが、「さっきは、ごめんなさい。植木鉢は職員に当たらんように足元をめがけて投げたんだ」と伝えてきた時に衝撃を受けました。彼は今まで、自分の思いが通らないと、その職員に乱暴にあたっていたために、また同じことを繰り返したと決めつけて、大きな声を上げてしまいました。子どもの気持ちが落ち着くまで一呼吸、二呼吸を待ってやれなかったのかと、猛省しました。

子どもと職員という立場の違いはありますが、共に成長していると実感できたエピソードです。職員も子どもから学ばせてもらっています。

同じ屋根の下で生活を共にするので、子どもの小さな成長がわかり、職員同士で大喜びできます。そんなことが職員にとって日々のやりがいになっています。

信じて待つ

子どもが学南ホームに入所する日はできるだけ、職員全員で迎えたいと思っています。勤務の都合で難しい時もありますが、「初めまして。私たちが、これからこの場所であなたと一緒に生活します。ここがあなたの居場所です」という意味を込めて迎えます。初日を大事にしたいと思っています。

巣立っていく子どもには、「何かあれば連絡しておいで」と言って送り出します。弱音を吐ける場所にしてほしいと思っています。施設暮らしが長く、生活体験が少ない子どもが多いので、ご飯を食べているのか、元気にしているのかと気になりますが、信じて待つことも大切だと思い、子どもからの連絡を待っています。

取材を終えて

桜が満開を迎える頃、学南ホームにお邪魔しました。「玄関の花を入れ替えないといけないと思っているんだけどな～」と少し萎れかけた花を気にしながら佐原啓理ホーム長と２人の職員が私たちを迎え入れてくれました。食堂でお話を聞きましたが、コーヒーを淹れる音、臭い、きれいに洗い終えた洗いかごの中の食器、整頓された調理器具や食器棚の食器類などを見て、「当たり前にある様な家庭で子どもたちの生活を支えたいと思っている」と語られる言葉通りの“生活感”を感じました。

取材中に子どもが遅めのお昼ご飯を食べに食堂に来て、「学南ホームの職員には本当に支えてもらっていると感じている。また頭の中ではよくわかっているんだけど、なぜか出来ないことがある」と語ってくれました。わかっているけどできないこと…子どもだけじゃないよ、「玄関の花！」と思いながら、玄関の花より、子どもが大事だなと、臆せず笑顔で語ってくれる子どもを見ながら感じました。

（文責：東 りえ）

門を入ると白井元ホーム長手作りの自転車置き場がある

子どもシェルター

「モモの家」通信

また新しい年度が始まりました。年度の代わりは何となくソワソワします。今年はコロナの影響もあり先が見えず予定もたちませんが、シェルターは急な入所はよくあることなので、ある意味通常営業かも知れません。

子どもシェルターモモには行き場のない子どもたちがやってきます。その中でも私が現在勤務しているシェルターには、逃げてきた子どもが一時的に来る安全な場所としての役割があります。ですがここ最近は、他施設に空きがないという意味での「行き場のない」子どもたちが来ることが多々あり、シェルターでありながら自立援助ホームのようでした。逃げて隠れて…といった危険があるわけではない人が、シェルターという場所に閉じ込められるということは、子どものことを考えた時に果たしてどうなのだろう…と疑問に思ってしまいます。他に引き受け先もないし行くところもなくて居場所もないのですが、だからと言って「仕方がない」の一言で終わらせることなのでしょうか。必要もないのに窮屈なシェルターで生活していくことで不満も出てくるでしょう、それでもスタッフとしてはシェルターの秘匿性や安全性を守る為に対応しなければならないと思うので、ジレンマを感じることがありました。いつになるかわからないけど次の行先が決まるまでとりあえずシェルターでやっていこう、ということになりますが、先が見えない中ではモチベーションを保つことも中々難しいものがあります。私としては、そこでなあなあになって崩れていくことのないようにしたいと思うのですが、迷ったり揺れたりすることも多く未熟さを痛感することばかりです。その度にスタッフ間で話をして前を向くようにしています。

モモのスタッフになり数年経ち、シェルターとしてどのようなありかたが今後求められるのか、現場の一スタッフとして、つらつらと考えてみることも出て来ました。子ども支援の一翼を担う一人になるべく今後も精進していきたいと思います。

（文責：H・M）

子どもの作ったチョコレートケーキ

庭に咲いている海棠

自立援助ホーム

「あてんぽ」通信

巣立ちの時

あてんぽは開設して6年目を迎えています。これまでに22名が巣立って行き、現在5名が在籍しています。

先日、あてんぽを巣立って行く前にAさんが、「あてんぽに来た時『ここで、いっぱい失敗してね』と言われたけど、そんなのムリ、できるわけない！と思ってた。でも、結局いっぱい失敗して落ちこんで、いろいろあったけど、失敗がうちを成長させてくれたんじゃなと思うわ」としみじみ語ってくれました。そして、「あてんぽに入ってきた後輩に言えることあるよ。『バイト続かんで、辞めても大丈夫。そのうち自分に合うバイト先見つかるけん』」と。

Aさんは当時、16歳であったためになかなかアルバイト先が決まらず、決まったアルバイト先では人間関係がうまくいかず、出勤できなくなり辞めてしまいました。そのうち、生活が荒れてきました。職員が声をかけても暗い

Cさんの作ったお弁当とハンバーグ

表情で、「大丈夫」と力なく笑うといった状態が続きました。職員も「どうしたら…」と途方に暮れてしまうことが多々ありました。でも、このように言えるようになったAさんを見てつくづく思います、「子どもたちは自身で成長するのだ！」と。

最近、あてんぽを巣立って行った子どもたちが訪ねて来ることが増えてきました。おしゃべりの中で、Bさんが、「あてんぽにいる時は、うちらは大人の人に守られていたんよな～出た後わかったわ。無茶苦茶して、悪かったなぁと今は思っとるよ。」、「あてんぽにもう一度入所したら、まともにバイトして、貯金するのに！」と言いました。こんな言葉に職員はとても力をもらいます。この子どもたちと一緒に生活した時間が、それぞれの思い出になっていることが何より嬉しいです。

さて、現在、あてんぽにいる子どもたちも巣立ちの準備を進めています。Cさんはアルバイトの合間に自炊の練習をしています。毎回、できたものを写真に撮って職員に見せてくれます。最初のうちは包丁を大ナタのように振るって、ドンガンと大きな音

を立てて食材を切り、床に大きく切れたジャガイモ、玉葱やニンジンなどが飛び散っていましたが、現在はとてもリズムよく繊細に切って調理できるようになりました。さすがです！

毎年、春先にあてんぽの軒にツバメが巣を作ります。今年も子ツバメたちがとても賑やかに鳴いています。あてんぽにいる子どもたちそのもののようです。間もなく、子ツバメも、あてんぽの子どもたちも巣立ちをするでしょう。大きく飛んで行け！

（文責：岡嶋安起）

アフターケア

アフターケア「en」通信

家庭の味を覚えてほしい

毎週木曜日、ボランティアのTさんがつくる惣菜を楽しみに、たくさんの子どもたちがenにやってきます。フードバンクから届く野菜を使って、毎回5品ほど調理し、人数分を弁当箱に分けて無料で子どもたちに渡しています。

4月のある週の献立は、鳥の唐揚げ、ポテトサラダ、大根とツナの和え物、かぼちゃのオリーブオイル炒め、ほうれん草のおひたし、の5品。3時間近くかけて5人分ほどを作りました。

もともと料理が好きだったTさん。「家庭の味を知らない子どもたちに、家庭の味のつくり方を覚えてほしい」という想いから、惣菜づくりを始めました。きっかけは、大量に頂いた茄子を揚げナスの煮びたしをはじめ、様々なナス料理に調理したところ、“美味しい！”と子どもたちに評判になったことでした。

それ以来、1年ほどの間に、ただ料理をつくるだけでなく、時には子どもと一緒につくることもあります。最近は、毎週木曜日にきまってやってくる一人暮らしのAさんが、一緒に惣菜を弁当箱に詰めてくれています。先日は、Tさんが料理をしている間に、Aさんがバナナマフィン作りに初めて挑戦。ネットでレシピをみつけて、自分で材料を買ってきて、大量のバターを湯煎でやわらかくして、食材を正確にキッチンスケールで測る方法をTさんに聞きながら

生地をこねます。時々“これでいい？”とTさんに確認したり、おしゃべりしながらお菓子をつくっている様子は、台所で夕食をつくる親の背中を見ながらお菓子づくりをする子どものような、温かい雰囲気がありました。

Tさんによると、毎週届く食材が違うので、その日にある食材でその場で献立を考えないといけないのが大変ですと言われていますが、スーパーやコンビニに売っていない、子どもたちが普段食べないような、和食の煮物を中心に、栄養バランスも考えながら料理をつくられているそうです。（文責　S・S）

事務局だより

第11回子供達のためのチャリティーコンペで多額のご寄付をいただきました！

県内外で活動する有志･企業が集まり、「自分達で出来る社会貢献を…」をテーマに、特に未来を担う子どもたちをサポートしようと始められたゴルフコンペで、今回で11年目の取り組みです。今回も多額のご寄付をいただきました。ご協力いただきましたみなさま、本当にありがとうございました。

マスクのご寄付をいただきました！

岡山県内や全国各地の有志の方々より、たくさんの布マスクをお送りいただいています。マスクが入手困難な今、大変ありがたいです。色も柄も様々で、見ているだけでも気持ちが楽しくなります。シェルターや自立援助ホームの子どもたち、アフターケアで支援している子ども・若者たち、職員で使わせていただきます。

赤い羽根共同募金　～「地域から孤立をなくそう」ささえあいプロジェクト～

本プロジェクトは、1月1日から2月28日の期間に、専用の郵便振替用紙で募金をしていただくことで、集まった募金に加算して社会福祉法人岡山県共同募金会から助成をいただけるというものです。今年もたくさんの皆様にご協力を頂き、1,970,000円もの助成をいただけることとなりました。今年度も「子どもの気持ちや意思を尊重し、寄り添う支援」というミッションを法人全体で共有し、互いの信頼関係を構築し、助け合うことができる体制づくりをしたいと考えています。ご協力くださったみなさま、本当にありがとうございました。

NPO法人ピルコンの染矢明日香さんをお招きし、職員・理事で性教育について学びました。

イオン黄色いレシートキャンペーンに参加しています

このキャンペーンは、毎月11日に、黄色いレシートをイオンモール岡山に設置されている専用の投函BOXへ入れると、レシートの合計金額の1%が子どもシェルターモモに寄付されるものです。毎月11日にイオンモール岡山でお買い物の際は是非、レシートの投函をお願いいたします。2019年4月から2020年2月の間に投函していただいたレシートの合計は5,076,264円でしたので、その1%の50,800円のご寄付をいただけることとなりました。

2月初旬、「雛人形を嫁入り道具の一つとして持たせてもらったけれど、モモの子どもたちに」と倉敷市にお住いのTさんからお電話がありました。戴きに上がると、新品でした。早速、事務局の玄関に飾らせていただくと、「玄関の戸を開けた時、お雛様が出迎えてくれてホッとする」といった言葉が子どもたちから聞かれました。

ありがとうございました。

編集後記

新型コロナウイルスによる、緊急事態宣言が出て自宅で過ごされた方も多いと思います。新緑の美しい時期に、外出禁止は今年だけにして欲しいと願いながら、当たり前の生活ができる日を心待ちにするこの頃です。　（東 りえ）

●ご寄付は金額の多寡に関わりなく下記へご送金頂ければ幸いです。

郵便振替口座　01370-4-52835　特定非営利活動法人 子どもシェルターモモ

（ご送金の際はお名前・ご住所・ご寄付である旨ご記入いただければ幸いです。）

この広報誌は㈱ベネシードの支援を受けて作成しています。